

宮城山岳通信 第34号

目次

巻頭言	千石信夫支部長・・・・・・・・・・2頁
定例役員会報告(8月・9月・10月)	事務局・・・・・・・・・・2～6頁
山行報告	
☆大峯奥駈修行②(山上ヶ岳～弥山)	八尾 寛・・・・・・・・・・7～9頁
☆セルフレスキュー講座	鈴田則文・・・・・・・・・・9～11頁
☆夏山山行(北アルプス)	佐藤善武・・・・・・・・・・11～13頁
☆初心者の為の沢登り教室	千石信夫・・・・・・・・・・14～15頁
☆本部・宮城支部合同山行(蔵王連峰)	八尾 寛・・・・・・・・・・15～17頁
☆第14回 親子登山教室(深山)	鈴田泰子・・・・・・・・・・17～18頁
行事記録	
☆日本野外教育学会 第27回大会報告	鈴田泰子・・・・・・・・・・19～20頁
☆第37回 東北・北海道地区集会	富塚和衛・・・・・・・・・・20～22頁
☆国際山岳平和祭 in 長岡 2024	千石信夫・・・・・・・・・・22～23頁
☆宮城支部ビールパーティ	鳥山文蔵・・・・・・・・・・23頁
☆第8回 宮城・山形支部交流会	八尾 寛・・・・・・・・・・24～25頁
随筆・エッセー	
☆救助活動の回想	
私が携わった遭難救助活動(報告)〈第2回〉高橋二義	・・・・・・・・・・25～27頁
今後の行事予定	事務局・・・・・・・・・・27頁
編集後記	会報・編集出版委員長・・・・・・・・27頁

巻 頭 言

支部長 千石 信夫

今年の夏は連日の猛暑が続き、10月に入ってもまだ暑い日がありましたが、その後急激に気温が変化し、体調が追いつかないことも多々ありました。異常気象がもはや「異常」とは言えない状況かもしれません。自然環境の変化が予想以上に進み、登山活動にもより一層の注意が求められるのでしょう。

さて、宮城支部では今年度の折り返しを迎え、前半の活動を無事に実施してきました。特に、本部の山行委員会との共同企画や、支部独自の登山教室を開催したことは、非常に貴重な取り組みだったと感じています。

共同企画では、山行委員会と連携することで、普段は交流のない地域の会員同士が交流する機会が生まれ、大きな成果を得ることができました。また支部の公益事業に関しては、本部の支部事業委員会主催の登山教室もありますが、距離や費用の面で地方からの参加が難しいのが現状です。このような事情を踏まえ、当支部では「安全登山」を目的とした独自の登山教室を開催し、日本山岳会宮城支部の活動を広く発信する良い機会となりました。

今年度の折り返しといっても、今年も残り二ヶ月となりました。年が明けると次年度のことを検討しなければならない時期になります。何やら忙しくなってきましたが、冬の山行や晩餐会などで皆様とお会いできることを楽しみにしています。

話題は変わりますが、先日の役員会で仙台出身の名誉会員・平沢亀一郎氏や榎有恒氏の顕彰についての提言があり、話し合われました。平沢氏に関しては、以前よく訪れていた仙台カゴに掲げられているレリーフから遠ざ

かっていることに反省させられました。今後は「平沢記念山行」などとして企画していきたいと考えております。また、榎有恒氏については登山家として非常に偉大な人物であるにもかかわらず、仙台には顕彰碑などありません。そのことに鑑み、次世代に引き継ぐためには、どのようなことがよいのか考えていくことにいたしました。会員の皆様にも、ご意見やアイデアをいただければ幸いです。

最後に、9月、10月と立て続けに訃報が届きました。宮城支部の第3代の支部長を務められた庄司駒男さん、そして、こよなく「オボコンベ」を愛した三宅泰さんが亡くなられました。ここに心よりご冥福をお祈りいたします。

【定例役員会報告】

■7月定例役員会は諸事情により休会

■令和6年8月定例役員会

日 時：8月21日(水)18:00～

場 所：仙台市生涯学習支援センター

出席者：千石、千葉、富塚、柴崎、草野、横山、遠藤、鈴田(則)、鈴田(泰)、八尾、鳥山
計11名

千石支部長より「お盆も終わり、秋に向かって様々な計画を進めますので、ご審議下さい」と挨拶があり、早速議事に入った。

《報告事項》

イ) 総務・財務委員会

(1) 総会決定事項について(富塚)

入会申込みが、当会サイトに設定した「入会申込み」フォームを利用した電子化で提出可能となり、従来の紙による提出と併用する。また入会金はこれまでの2万円から1万円に減額。尚、今年の本部・晩餐会は12月7日(土)、来年の総会は6月21日(土)に開催。

(2) 2024 年支部連絡会議の日程(富塚)

今後の支部連絡会議は 9 月 19 日(木)、12 月 19 日(木)、2025 年 3 月 26 日(水)、5 月 28 日(水)に開催。何れもズーム会議で実施。

(3) 宮城・山形支部交流会の案内(千石)

山形支部が幹事で 9 月 15 日(日)～16 日(月)にかけ鳥海山の遊楽里(ゆらり)を会場に開催。宮城支部からの参加は現在 6 人ぐらいで、もう少し増やしたい。

(4) 令和 6 年度第 3 回(6 月度)、第 4 回(7 月度) 理事会議事録について(富塚)

(5) 第 14 回登山教室指導者養成講習会開催の案内(富塚)

9 月 21 日(土)長野県小諸市にある安藤百福記念アウトドア・アクティビティセンターで机上講習。翌 22 日(日)に水ノ塔山周辺で実技講習。尚、冬の講習は来年 2 月予定。

(6) 第 37 回東北・北海道地区集会参加結果 (詳しくは「行事記録」参照)

(7) 東北・北海道地区集会時の提案に関して

(6) と (7) は富塚担当。青森支部より、本部サイトに東北・北海道バージョンを設け、支部事業並びに山行行事の共有化を図る提案があった。→デジタル委員会で検討したい。

(8) 高頭祭(アジア山岳連盟 30 周年事業)の参加結果について(千石)

越後支部主催の高頭祭に千葉副支部長と 2 人で参加。尚、UAAA30 周年記念の長岡大会も開催された(詳しくは「行事記録」参照)。

(9) ビールパーティー実施結果(富塚)

真夏恒例の催しに 14 名が参加、暑気払いしながら懇親を深めた(「行事記録」参照)。

ロ) 山行集会委員会

(1) 露払い山行(6/29)実施結果(草野)

釜石市の五葉山・・・「山行報告」参照

(2) 夏山山行(7/16～20)実施結果(八尾)

新穂高温泉～双六小屋～西鎌尾根～

槍ヶ岳～上高地・・・「山行報告」参照

(3) セルフレスキュー講座開催結果(鈴田)

一般から 20 名が参加、好評だったが段取りで反省点があった・・・「山行報告」参照

(4) 沢登り教室(9/7)実施計画(千石)

渡邊輝男先生を招き、初心者向けに基礎技術習得を目的に二口溪谷で開催。

(5) 第 14 回親子登山教室(10/19)実施計画(鈴田)・・・駒返しコースで深山を往復する。手伝う 6 名と当日の準備分担を打合せ。

(6) 本部・宮城支部合同山行(10/5～6)の実実施計画について(八尾)

主催は本部の山行委員会。宮城支部から 7 名、東九州支部 6 名、本部 4 名の 17 名参加。

ハ) 会報・編集出版委員会(鳥山)

「宮城山岳通信」第 33 号の発行が 8 月にズレてしまい陳謝。第 34 号は 10 月の本部・宮城支部合同山行で締め 10 月末か 11 月発行。

ニ) デジタル委員会(千石)

加藤委員が欠席となり次回に見送る。

ホ) 他委員会

自然保護・科学委員会の柴崎委員長より 10 月 19 日(土)、20 日(日)の両日、本部主催の自然保護全国集会が開かれる。宮城支部から風力発電とメガソーラーをまとめて報告する。

《審議事項》

○支部のデジタル化推進に向けての取り組み及び推進のための組織体制について

千石支部長：ここ数年、若い会員が入会し、インスタグラム、SNS、LINE などに対応できる組織を作るアイデアが欲しい。青森支部からの提案も参考にして。

八尾：データのアーカイブ化、情報交換、ライブ配信の 3 点に絞ってワーキンググループ(WG)を作る。加藤メディア委員長が忙しい

ので、WGはズーム会議で進めたらどうか。
富塚：早速、WG(加藤、富塚、八尾、石川、
鈴田泰子)を設け、取り組み等を検討する。

《その他》

○榎有恒顕彰碑設置に向けた動きについて

富塚：先日のビールパーティーで、榎さんの
顕彰碑設置が話題となり、知り合いの元市議
会議長に話してみたが、感触が良くなかった。

千葉：個人的に北九州市にある榎さんの略歴
碑を訪ねた。地元仙台ゆかりの泉ヶ岳麓にあ
ればと思っている。

柴崎：榎さんの碑となると、日本山岳会宮城
支部のみならず山岳連盟、旧制第二中学校(現
在の二高、慶應大学などと話し合いをしなけ
ればならない。今後、榎さんについて調べて
みたかどうか。

八尾：碑を建てなくても、年1回泉ヶ岳に登
る山行を「榎有恒 記念登山」と、冠を付けた
らどうか。広く募集して。

鳥山：榎さんの前に、仙台カゴにある平沢亀
一郎さんのレリーフを訪ねる山行を定期的に
やるべきではないか。

様々な意見が出され、今後の継続話し合い
となる。

■令和6年9月定例役員会

日 時：9月20日(金)18:00～

場 所：仙台市生涯学習支援センター

出席者：千石、富塚、柴崎、高橋、横山、草
野、遠藤、加藤、八尾、鳥山 計10名

冒頭、千石支部長より庄司駒男会員が逝去
され、ご冥福をお祈りしますと報告があった。

《報告事項》

イ) 総務・財務委員会

(1) 支部連絡会議参加報告について(千石)

9月19日のZoom会議に支部長、富塚事務

局長が出席。デジタル化を推進し入会申込が
簡略化。郵便料金の値上げで収支を圧迫する
ので新会費を検討。120周年記念式典及び晩
餐会を開催する。

(2) 令和6年度支部運営交付金(千石)

6月30日現在の会員数で宮城支部は84,000
円が交付される。

(3) 山形支部との交流会について(八尾)

後記の「行事記録」参照

(4) 福島支部主催・山の日制定10周年記念
「松田宏也氏記念講演会」参加報告(富塚)

9月15日(日)に開催された講演会とその後
の懇親会に参加、交流を深めてきた。

(5) 会報『山』配信用データの今後の取扱い
について(富塚)

これまで試験的に配信してきた会報『山』
は、8月号で終了、今後はグーグルドライブ
からのダウンロード方式となる。尚、郵送希
望があれば可能とのこと。

(6) 毎日新聞からの取材について(千石)

毎日新聞長野支局より1918年10月23日に
起きた旧制仙台二中(現・仙台二高)の先生と
生徒合わせ9名が亡くなった気象遭難につい
て宮城支部に教えてほしいと連絡があった。
準会員で蔵王に詳しい渡辺典男氏に担当して
もらった。柴崎氏より東北大で蔵王の気象を
まとめた人がいるので紹介してみたらと提案。
千石氏が記者と連絡をとり、必要であれば資
料と筆者を紹介することに。

(7) 令和6年度第5回(9月度)理事会議事録
について(富塚)

ロ) 山行集会委員会

(1) 沢登り教室 実施結果について(千石)

参加者は一般2名、会員3名、支部友3名
の8名。一般参加者より沢登りの楽しみを教
えていただいたと好評だった。高橋氏より会

場となった秋保ビジターセンターから相応しい教室に利用してもらい喜んでいと報告(詳しくは後記「山行報告」参照)。

(2) 本部・宮城支部合同山行の現状(八尾)

参加者は宮城支部5名、本部2名、他支部10名の計17名。蔵王連峰の縦走なので風と寒さに注意し実施する。柴崎氏より東北大山の会の小屋が刈田岳の近くにあり、当日OBたちが集まっているので寄ってみて下さい。

(3) 親子登山教室の担当詳細確認(千石)

ハ) 会報・編集出版委員会(鳥山)

「宮城山岳通信」第34号は10月末までの山行及び行事、集会で締めて、11月中旬のメール配信をめざす。

ニ) デジタル委員会(加藤)

○支部会員等のライングループ作成の提案

ライン・アプリはメールアドレス無しで送ることができ便利。宮城支部でグループを作っているのが現在8名だけである。少しずつ加入会員を増やしていきたい。

ホ) 他委員会

○自然保護・科学委員会(柴崎)

10月19・20日に開催される自然保護全国集会に向け、宮城支部として気仙沼、石巻、白石での風力発電とメガソーラーを調査、自然破壊と景観損害についてまとめ報告する。

《協議事項》

(1) 支部のデジタル化について(千石)

グーグルアカウントをとって、支部の総会資料をはじめ報告書、書籍などをデジタル化して保存したい。そしてHPとリンクし外部に発信する。富塚氏や八尾氏から提案があったポイントが重要。一般の方に見てもらえる取り組みが必要。千石氏よりデジタル推進委員会とデジタル委員会を統合する話があった。

(2) 榎有恒顕彰碑構想の今後の方向(千石)

柴崎氏：福岡にある榎さんの記念碑を現地に行って調べてみたらどうか。検討するには慶大、仙台二高などと話し合う必要あり。

高橋氏：顕彰碑を建立するには資金集め。

富塚氏：宮城支部単独ではやれない。周囲の盛り上げ作りが必要。

鳥山氏：顕彰碑とは別のアプローチがあってもいい。例えばオーエンス泉ヶ岳自然ふれあい館を“MAK I 泉ヶ岳自然ふれあい館”に、館内に榎さんのギャラリーを設け、大人から子供たちに触れ合ってもらったらどうか。

千石支部長から顕彰碑調査委員会なるものを立ち上げ、委員に千石、千葉、富塚、遠藤、加藤の5名で検討したい。

《その他》

○柴崎会員がまもなく1500座登頂を達成する。1499座は黒森に登り、1500座は11月頃、笹谷峠の北側にある鹿増山(1047m)に挑む。

○富塚：山岳古道調査も大詰めを迎え、各支部で地元紙にPR活動をしている。そこで宮城支部として河北新報社へ記事掲載を依頼。

■令和6年10月定例役員会

日時：10月16日(水)18:00～

場所：仙台市生涯学習支援センター

出席者：千石、富塚、千葉、柴崎、草野、遠藤、八尾、鈴木則文、鳥山 計9名

冒頭、千石支部長挨拶より10月11日に三宅泰会員が逝去され、御冥福を祈りますと報告があった。

《報告事項》

イ) 総務・財務委員会

(1) 令和6年度支部運営交付金(再送)(千石)

6月時点での会員数で交付金が決まるが、宮城支部の会員数に間違いがあり、修正交付金は1万円増え94,000円となった。

(2)『山9月号』データ版のお知らせ(冨塚)

今後、会報『山』のデータ版は毎月20日頃
グーグルドライブにアップロードされ、ダウン
ロードしてご覧ください。保管場所は「事務局
⇄全会員」内の「会報『山』」フォルダから。

(3)毎日新聞からの取材(その後) (千石)

具体的な返答はなかった。

ロ) 山行集会委員会

(1)本部・宮城支部合同山行実施結果(八尾)

(詳しくは「山行報告」参照)

(2)親子登山教室の参加申込み状況(鈴田)

一般申込みは5組8名。宮城支部から6名
が参加、合計14名で実施予定。当日の天候が
少し懸念される。

ハ) 会報・編集出版委員会(鳥山)

「宮城山岳通信」第34号は11月上旬の発行
をめざし編集する。

二) デジタル委員会

○支部会員等のライングループ作成の進捗状
況について(千石)

宮城支部の会員にライングループ参加を呼
び掛けている。揃ったらライン会議を開きた
い。是非、ライングループに入ってほしい。

ホ) 山岳古道調査特別委員会

○全国山岳古道調査 ZOOM 会議報告(冨塚)

10月7日に開催。①今年開催した熊野古道
の集中山行が好評で、来年4月26(土)、27
日(日)大分県の国東半島で集中山行を実施。

②データ提出の進捗状況：119 古道のうち提
出済は64,未着41,残りは部分的に到着。尚、
古道データの提出が終了している支部は17
で、宮城支部は5つの古道データ提出済み。

③広報：本部はNHKはじめ全国紙に本プロ
ジェクトの記事を送付。支部では地元紙に働
き掛けており、宮城支部も河北新報社に依頼。

《協議事項》

(1)支部のデジタル化について(千石)

「報告事項」の(二)で説明したので省略

(2)榎有恒顕彰碑構想に関する動き(千石)

余り進んでいない。機関誌『山岳』に榎さ
んが相当書いている。先ず資料を集める。ま
た、「オーエンス泉ヶ岳自然ふれあい館」の館
長さんと話しする機会があり、施設内に“榎
コーナー”を設けることに前向きであった。
柴崎→機関誌『山岳』に榎さんが何を書い
ているかを調べるのが大事。

八尾→榎さんのサイン色紙をネットで見つけ
た。

■■ 訃 報 ■■

■庄司駒男 会員(会員番号4817)

令和6年9月11日、逝去されました。謹ん
でご冥福をお祈り申し上げます。

故人は昭和33年5月、宮城支部が設立され
た直後、日本山岳会に入会。宮城支部の第3
代支部長(1985～1990年)として6年間、支部
の発展に尽力されました。また、支部機関誌
『宮城山岳』の第1号(1975年)から第5号
(1982年)まで編集委員を務めました。山岳
写真を得意とし、その力作を『宮城山岳』に
寄せていただきました。

■三宅 泰 会員(会員番号10060)

令和6年10月11日、逝去されました。謹
んでご冥福をお祈り申し上げます。

故人は山に登るだけでなく、会報、書籍に
健筆を振るう文筆家でありました。亡くなる
まで「会報・編集出版委員」を永く務めていた
だき感謝申し上げます。大好きな“オボコン
ベ”に登り、4年前に自著『オボコンベ～あ
の日あの時の山～』を自費出版されました。
また色鉛筆画を得意とし、多彩な山岳風景画
にこころ和ませられました。

【山 行 報 告】

大峯奥駈修行に参加して

(2) 山上ヶ岳～弥山

報告者 八尾 寛

実施日 令和6年6月26日(水)～30日(日)

コース 吉野～熊野 おおみねおくがけみち 大峯奥駈道

参加者 富塚和衛、八尾 寛 以上2名

参籠所の朝食は、ご飯とみそ汁だけである。しかし、おかわり自由で量はたっぷりある。3時30分、法螺貝の音とともに雨の降る中を出発し、ライトを頼りに山上ヶ岳を下り始めた。どこをどう歩いているのか、皆目わからない。しかし前回の経験で、しばらくは危険箇所がないことが分かっているので不安はない。4時40分、第66番摩・小篠宿 1616 ㍎で勤行。空も明るくなり、もうライトはいらない。積み上げられた石垣や石畳の道が、ここにかつて数多くの堂坊が立ち並んでいたことを物語っている。廃仏毀釈以前の櫻本坊も、ここにあったという。

トウヒの若木の枝をかきわけ明るい尾根道を歩む。高い木の多くは立ち枯れている。大峰山系ではトウヒやシラビソが一斉に立ち枯れ、問題になっていた。環境汚染、気候変動、シカの食害など、様々な原因が考えられる。しかし、みずみずしい若木の群生は、そのような不安を一掃してくれる。年老いた木が枯れ朽ちていくことにより、若木に水、光、養分を提供しているのではないだろうか。長い年月をかけ、新陳代謝のサイクルが繰り返しているのかもしれない。

5時30分、第65番摩・阿弥陀ヶ森の女人結界門をくぐった。柏木へ下る登山道との分

岐点である。中学生の頃だったろうか、父と兄と3人で山上ヶ岳に登り、柏木へ下ったことがある。延々と続く長い下り道は、相当足にこたえたものだ。しかし思い出に浸るまもなく、行者一行はどんどん前進した。いよいよ大普賢岳への登り返しが始まった。シャクナゲの大群落をかき分け、“ロッコンショージョー”を掛け合いながら登り詰め、6時50分、小普賢岳のピークを通過する。いったん岩場を下り、美しい笹原を登り返し7時10分、大普賢岳 1780.1 ㍎の頂上に到着した。第63番摩である。横殴りの雨が吹き付ける中、勤行する。下りは、しばらくはなだらかである。ゴヨウツツジ(シロヤシオ)の群落の中を進んだ。シャクナゲといい、シロヤシオといい、大普賢岳は花の山である。花の頃にも訪れたいものである。



▲大普賢岳頂上の岩場にはりつくゴヨウツツジ。風雪に耐え、曲がりくねった幹に注目

雨はだんだん強まってきた。尾根筋を歩いていると、強い西風が吹き付ける。やがて陰しい岩場に差し掛かった。薩摩転び、屏風横駆、内侍落しなどの難所が連続する。どこがどこかは、よく分からないが次々と鎖場くさりばをよじ登る。国見岳 1655 ㍎の肩を越えると、断崖絶壁に付けられた幅の狭い回廊を下っていく。50年前も、ここを命がけで通ったことを思い出した。前後の人との間隔が広がるけれど慌

てることではない。やがて全員が第 60 番靡・稚児泊の小さな広場に集合し、8 時 45 分ごろに勤行した。ここからは深い苔の森を進んで行く。9 時ごろ少し開けた場所で弁当を半分食べた。雨をしのぐ場所もない。またたくうちに弁当箱に雨がたまり、お茶漬けのようになった。

再び出発し、9 時 20 分ごろ七ツ池の横を通り、底へ向かって降りた。尾根に大きな凹地が形成されている不思議な地形である。この辺りは、おそらくカルスト地形になっているのだろう。露出している白っぽい岩は石灰岩で、七ツ池は雨水の浸食によるドリーネと呼ばれる凹地なのだろう。足元の下には、巨大な鍾乳洞が形成されているのかもしれない。再び険しい岩場を登り詰め 9 時 45 分、第 59 番靡・七曜岳 1584 ㎡に到着した。太古の海が地殻変動により隆起し、雨水により浸食され、チャートの層が露出したものだろう。今から 50 年前、雨の中、この硬い岩の上に 6 人の若者が辿り着き、お互いの無事をねぎらったことが思い出される。

ここからは、ところどころに岩場があるものの、概ねなだらかである。行者還岳頂上への道を分け巻いていく。沢の底へ向かってガレ場を下り、行者還岳の断崖絶壁の下を歩んでいくと 11 時 30 分ごろ、第 58 番靡・行者還ノ宿に到着した。新しい避難小屋が立っている。50 年前、ここで 6 人の若者が前進すべきか、エスケープすべきかを議論した。誰もが極度に疲労していた。「死ぬかと思った」とエスケープを主張する者もあれば、「ここまで来たのだから、弥山小屋まで頑張ろう」という者もいた。結局、少し先の天川辻で別れ、4 人が天ヶ瀬へ向かって下り、2 人が弥山へ向かったのである。

行者還ノ宿からは、なだらかな道が続いて



▲行者還ノ宿に建つ避難小屋。背景に行者還岳が聳えている

いた。バイケイソウが群落を作っている。中には白い花を咲かせているものもあった。5 弁の白い花を付けた高さ 30 ㌢ぐらいの草が群生している。クサタチバナである。その一角はフェンスで囲われていて、「何人なりとも無断で立ち入ることを禁ずる」と書かれた札が吊されている。シカからではなく、人による乱獲から保護しているのである。真下を行者還トンネルが開通し、車で近くへ来られるようになった。中には営利目的で植物採集に来る不届き者がいるのかもしれない。この美しい花園を後生に残しておきたいものだ。



▲西側斜面を覆いつくすクサタチバナ群落

13 時 20 分、チシマザサの美しい草原に辿り着いた。第 57 番靡・一の多和(一ノ峠)である。ここで弁当の残りを平らげた。雨は相変わらず降り続いていた。弁当箱にたまった雨

水と一緒に、ご飯粒を口へ流し込んだ。この
辺りから先は、様々なルートが奥駆道に合流
する。なかでも行者還トンネル西口駐車場か
らの道は、八経ヶ岳日帰りコースとして、近
年よく使われるようだ。そのためか合流点の
奥駆道出合からは、比較的良好整備された道
になった。14時20分、第56番摩・石休場宿
で勤行。弁天の森と呼ばれる美しい森がひろ
がる。

15時15分、第55番摩・聖宝(しょうぼう)
ノ宿に到着した。高下駄をはいた理源大師の
銅像がある。「触ったらアカン。触ると雨にな
るで」。もう一日中、雨である。昨日、ここを
通った何者かが触っていったのだろうか。「そ
のような言い伝えがあるぐらい、雨の多い所
や」と住職。紀伊半島は東、西、南の三方を海
に囲まれている。それぞれの方面から吹く、
湿気を含んだ風が大峰山脈にぶつかり、雨を
降らせるのだ。

ここから、いよいよ胸突き八丁と呼ばれる
急登が約1^き続く。かつては殆ど直登だった
のが平成2年、今上天皇が皇太子の時、つづ
ら折りの新道が作られたという。このとき徳
仁殿下は、洞川から山上ヶ岳に登り、おそら
く龍泉寺宿坊で一泊されたのであろう。翌日
は奥駆道を辿り、弥山小屋に一泊され、天川
河合へ下られた。長女の愛子内親王のお印が
ゴウツツジなのは、奥駆道とゆかりがある
のだろうか・・・。

50年前、私が胸突き八丁を登ったときは旧
道だったが、今回は新道である。それでも、
かなりの急登だ。雨足も強くなってきた。「サ
ンゲ、サンゲ」「ロッコンシヨージョー」。ここ
を登り切れれば弥山の頂上である。最後の力を
絞って登ろう。先頭に行く住職の「サンゲ、サ
ンゲ」が遠くなった16時45分ごろ、右手に大

きく新しい弥山小屋が見えた。小屋前の広場
には、赤いテントが2張立てられている。50
年前の夕暮れは、小さな古い山小屋の前で、
小屋番さんが出迎えてくれたものだ。徳仁殿
下が泊まれた際に建て替えたのだろうか。
しかし、修行の一行は山小屋の前を通り過ぎ、
鳥居をいくつかくぐり、頂上の第54番摩・弁
財天(弥山神社)に参拝した。はや午後5時で
ある。空腹を抱えて山小屋に到着したが、す
ぐに中へ入れてもらえない。濡れたまま上へ
あがるのはレッドカードである。濡れた服を
全部脱いで乾燥室へ入れ、段ボールの敷かれ
た廊下で乾いた服に着替えた。ところが雨具
を着けていたにもかかわらず、一^{いっちょうち}張羅のズボ
ンまでも濡れてしまったのである。ステテコ
なら、まあ良いか。経本も濡れてしまった。
ファンヒーターで乾かそう。

立ち枯れし トウヒの元に露受けて
若木生き生き枝を伸ばせり
岩尾根のゴウツツジのたくましく
花美しくあれと御印(みしるし)
雨の峰 登り下りも五十年(いそとせ)の
時を隔てて楽しくなりぬ
難所越え 巖(いわお)の上に佇めば
眼(まなこ)に浮かぶ友垣が顔
山小屋は おかわり自由古代米
お櫃^{いづ}たちまち空しくなりぬ
(つづく)

公益事業山行

セルフ・レスキュー講座

報告者 鈴田 則文

実施日 令和6年7月13日(土)

会 場 秋保二口キャンプ場

参加者 宮城支部＝千石信夫、高橋二義、細

川光一、千葉正道、遠藤幸寿、鳥田笑美、鳥田伊志、鈴木則文、鈴木泰子、松元秀平、渡邊典男 計 11 名

他会員＝中村勉、尾崎史朗、加藤陽子(以上青森支部)、中川武、田村典子(以上東京関係) 計 5 名、一般＝20 名 合計 36 名

令和6年7月13日(土)、宮城支部主催の「セルフ・レスキュー講座」が、秋保二口キャンプ場で開催されました。この講座は、登山者が自らリスクを回避するための知識や技術を身に付け、安全な登山を楽しむことを目的としています。宮城支部のメンバーを含め、登山愛好者 30 名以上が参加し、アカショウビンやヒグラシの鳴き声が響く、美しい自然の中で講習が行われました。



▲渡邊輝男先生を囲んで指導を受ける

講師は渡邊輝男先生です。著書『ヤマケイ・テクニカルブック 登山技術全書 No. 11 セルフレスキュー』で知られる渡邊先生の指導は、わかりやすいと評判の通り、実践的で具体的でした。セルフ・レスキューの基本理念について説明され、山の天気は平地とは大きく異なるため、事前の計画と準備が重要であること、計画書の提出や山岳保険加入の必要性を力説されました。特にヘリコプターの救助費用が1分あたり1万円と高額であり、保険は必須であると強調されました。



▲足首捻挫の応急処置を習う

続いて、GPSの活用と「ココヘリ」の有効性を解説されました。「ココヘリ」はGPSを利用した検索システムで、位置情報を迅速かつ正確に提供するため、救助活動において非常に有効です。しかし、GPSに頼りすぎるものの危険性も指摘され、GPSが故障したり、電池が切れたりする可能性を考慮しなければならないこと、そして実際にGPSに頼りすぎて遭難する例もあるため、地形図とコンパスを持ち歩き、地図読みをすることが重要であると説明されました。



▲木陰の広場でセルフレスキューの講義

ウェアのレイヤリング(重ね着)の重要性やファーストエイドキットの見直しの重要性についても説明され、足首の固定方法としてのテーピングの実演が行われ、参加者は実際に施術を体験しました。また、レスキューシートや100均のポンチョ、45リットルのポリ袋

の多用途利用方法についても学び、ツェルトを使い慣れ、すぐに取り出せる場所に入れておくこと、そしてヘッドライトの重要性も強調されました。

ロープワークにおいては、クライミング用途と一般登山のロープワークの違いを学び、6ミリの補助ロープ(10メートル)やスリング(120センチ)を使ったハーネスの実演が行われました。固定方法や確保の技術も詳しく説明され、参加者は実際に体験しました。使えないレスキューセットを持ち歩くことの無意味さ、更にうる覚えで使用する事の危険性を指摘され、実用的な装備選びの重要性を強調されました。

参加者からは、「具体的で実践的な内容が多く、とても役に立った」という声が聞こえ、講演後には著書の愛読者が、なごやかに渡邊先生と記念撮影する姿も見られました。今回のセルフ・レスキュー講座は、登山者が安全に登山を楽しむため非常に有意義な講座となり、参加者は実践的な技術を学び、自らリスクを回避するためのスキルを身に付けることができました。



▲参加者全員で記念式典

共益事業山行

夏 山 山 行

報告者 佐藤善武

実施日 令和6年7月15日(月)～20日(土)
山 域 北アルプス縦走 新穂高温泉～

西鎌尾根～槍ヶ岳～上高地

参加者 八尾 寛(SL)、千石信夫(SL)、
富塚和衛、石川弘子、佐藤善武 以上 5名

【7月15日(月) 曇り】

22時、仙台東口に集合し、22時30分発の高速バスで富山駅に向け出発。仙台は曇り、目的地の天気を気にしながら期待と不安の中、バスに揺られ8時間の移動。

【7月16日(火) 晴れのち雨】

朝6時30分、富山駅に到着。バスを降りると青空が見え少し安堵する。朝食を各自済ませ、7時58分発の高山線「ひだ6号」で神通川沿いを走り、どんどん山の奥へ入って行き、高山駅に9時35分到着、ここでついに雨が降ってくる。急いで9時40分発の濃飛バスに乗り換え、趣のある古い街並みを抜け、さらに山の奥の方へ走り、やっと11時12分新穂高温泉に到着する。

ついにスタート地点に立ち、雨の降る中、12時14分わさび平小屋を目指し“ドキドキ、ワクワク”しながら林道を歩き始める。アルプスの山は雲に隠れて、まだ姿を見せてくれない。13時40分わさび平小屋に到着。雨がどんどん強くなって来て、天気回復を願いながら2日目が終わる。

【7月17日(水) 雨時々曇り】

3日目、今日から本格的に登山が始まる。5時20分、雨の降る中わさび平小屋を出発。途中、雨が上がり蒸し暑くなったが、風穴で涼をとりながら5時40分、小池新道登山口に到着。ここ最近の雨で登山道が流され、迂回路になっており(しかも氷の上を歩き怖かった)緊張感が増す。沢沿いの急登を上っていると、また雨が降って来て、雨具を脱いだ



▲高山植物が咲く急登を喘ぎながら登る

り着たりを繰り返しながら、まだ長い急登が続く。登山道の脇に咲いている可愛い高山植物が、疲れを癒やしてくれた。

9時38分、鏡池(2282m)にて昼食。雲に隠れている槍ヶ岳を思いながら。わさび平小屋のお弁当を食べ休憩。時より雲の合間から西鎌尾根が姿を現し、期待が膨らむ。

10時10分、鏡池を出て、11時30分に弓折乗越(2555m)。ここから尾根を歩き、双六小屋を目指す。雪渓、花見平、くろゆりベンチを通り、双六小屋が近くなってくると、風と雨が強くなって来た。



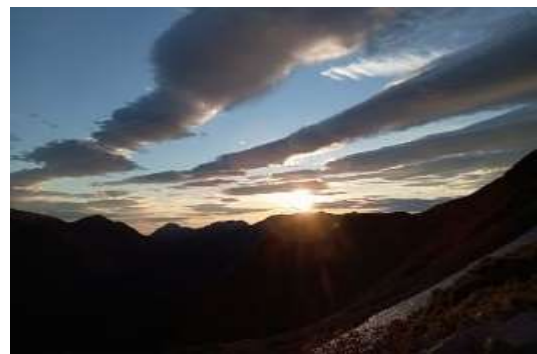
▲真夏の雪渓を歩きながら双六小屋へ

13時20分、双六小屋に到着。濡れた雨具や服を着替え、乾燥室に持って行き明日に備える。夕食までの間に、地図を見ながら山の話など聞きながら楽しく過ごし、天気予報を確認する。明日から天気は回復傾向で晴れの予報、晴れる事を願いながら就寝。しかし夜

は、かなり雨が降っていた。高山病なのか、頭が少し痛い。

【7月18日(水) 晴れ】

今日は、槍ヶ岳アタックの日。4時に起床し外を見ると、空が明るくなっている。皆で朝日を見に行き、今まで雲に隠れていた北アルプスの山々が姿をあらわし、この素晴らしい景色の中にいる幸せを感じた。



▲日の出とともに北アルプスの山々が輝く

双六小屋に戻り5時に朝食を済ませ、6時出発。最高の天気の中、槍ヶ岳に向けて縦沢岳を登って行く。振り返ると、双六岳と双六小屋が綺麗に見える。

6時40分、縦沢岳山頂(2755m)、ついに槍ヶ岳が姿を見せた。西鎌尾根越しの槍ヶ岳。この絶景は一生忘れられない程の感動でした。ここからは西鎌尾根を歩いていく。

8時15分、硫黄乗越。9時20分、左俣乗越、鎖場などを越え11時30分、千丈乗越に到着



▲縦走の稜線から槍ヶ岳を遠望

した。西鎌尾根は前を見れば、どんどん近づいてくる槍ヶ岳、右を見れば今まで歩いて来た小池新道、鏡平山荘や笠ヶ岳、左を見れば鷲羽岳、赤岳、硫黄岳、燕岳、下を見れば綺麗な高山植物、雪渓、上を見れば青空に浮かぶ変わりゆく雲、後ろを見れば、今歩いて来た綺麗な尾根道、本当に何処を見ても凄いとしか言えません。感動の連続です。

千丈乗越を登れば、もう槍ヶ岳はすぐそこです。しかし、かなりの急登、空気も薄いののでゆっくり行き13時15分、槍ヶ岳肩に到着。小槍、大槍の前で記念撮影。



▲天を突く槍ヶ岳バックに全員で記念撮影

13時45分、槍ヶ岳山荘で名物のカレーを食べ14時30分、山頂にアタック。岩、鎖場、岩に突き刺さった鉄の棒、梯子を、先頭の八尾さんに手や足の位置を教わりながら登って行く。凄い岩場を登っているのですが、もうすぐ頂上という高揚した気持ちが勝り、笑顔が止まりません。

14時50分、ついに登頂成功です。360度遮る物はなく、遠くの山々や富士山に言葉を失い、素晴らしい景色に見とれてしまいます。頂上(3180m)に到着すると、平らなのに何故か怖くなり、腰が引けてしまいます(笑)。

【7月19日(木) 曇り】

4時起床、5時朝食、5時45分に上高地へ下山開始です。朝はガスが濃く、槍ヶ岳をも



▲槍沢カールを下り、上高地へと向かう

う一度見る事ができない中、槍沢カールを下っていきます。

7時、槍沢グリーンバンド。ここから緑が増してきて、7時55分天狗原分岐。ここから見上げるカールが、とても綺麗です。カールの中を猿の群れが歩いていました。高山植物も増えてきて、次々にお花畑があらわれます。9時45分、ババ平キャンプ場。10時20分、槍沢ロッジ。12時10分、横尾山荘、ここで昼休憩、醤油ラーメンがとても美味しかった。

13時50分水壁の宿・徳澤園、さらに梓川の清流を見ながら下り、16時5分上高地山荘・西糸屋に到着。約19^{キロ}の道のりを歩き、本日のゴールとなりました。

温泉に入り、今までの疲れを癒やし、18時に豪華な夕食を食べながらビールで乾杯。その後も部屋に戻り、先輩方と山の話で盛り上がり、楽しい時間を過ごすことが出来ました。また、北アルプスに来たいと思う最高の夏山山行になりました。

【7月20日(金) 雨のち晴れ】

9時30分、上高地現地解散

公益事業山行

初心者の為の沢登り教室

報告者 千石信夫

実施日 令和6年9月7日(土)

場 所 二口峡谷 名取川本流 二口沢

コース 白糸の滝入口～二口沢遡行～南沢出
合～翠雲荘～林道下山～白糸の滝入口

講 師 渡辺輝男 先生

参加者 会員＝千石信夫、千葉正道、細川光
一 3 名 支部友＝鳥田伊志、能勢真人、2
名 一般公募3名(初心者) 計8名

会 費 4,000 円(講師謝礼・交通費等)

秋保ビジターセンター駐車場に集合し、白糸の滝入口に移動する。沢に入る前に渡辺輝男講師から、沢登りについての心構えや、クライミングと沢登りの違いなどレクチャーを受けた。現在の傾向としては登り方によって変わるが、沢登りで使用するロープの質は伸縮しないものを使用し、径は細くなってきていて軽量化されていることなど説明があった。そのほか使用する装備について、ハーネスやスリングなどの説明を1時間ほど行った。参加者には昔、沢登りをした経験者もいて、装備の発達には目を見張るものがあると驚いていた人もおられた。



▲滝の前で参加メンバーと

そのあと沢に入り遡行を開始した。途中数ヶ所2～3メートルの滝があり、講師のビレイのやり方などを見ながら歩いた。沢登りにおいても現在、沢のどこにいるか大事なので、



▲右岸をへつりながら沢登りの実践

沢の支流など地形と地図と照らし合わせ、現在地点を確認することなどを教えていただいた。最後はロープワークの講習も行い、スリングを使ったビレイの支点の取り方やセルフビレイの方法、また実際にトップとしての後続のビレイの体験などを行った。



▲ロープワークやビレイの実技を学ぶ

その後、南沢出合から翠雲荘、番所跡を通り、林道を下って出発地点の白糸の滝入口にて教室終了とした。ビジターセンターまで移動し、参加者の感想など聞き解散とした。



▲沢登り教室を終え、参加者で記念撮影

今回の企画は、沢登り教室として一般の登山者に向けて開催したのは宮城支部として初めてであった。このような公益事業の目的は、登山の楽しみを知ってもらう、登山者が安全に登るための技術を習得してもらう、そして宮城支部の存在を知ってもらうことが挙げられる。セルフレスキュー講座に参加された一般の方も、今回参加して大変良かったと話していた。全体としては好評であったと思う。

本音を言えば、支部の沢登り経験者も改めて今の時代の沢登りの装備や考え方を再認識したのではないかなと思う。以前は、高橋二義会員がこのような講師役として支部会員の技術向上を図っていたが、残念ながら引き継ぐ会員が不在となった反省がある。

公益事業として、一般の登山者の為のセルフレスキュー講座などは、引き続き毎年でも開催できれば、結果として支部会員の技術向上につながり、安全登山に寄与すると考えています。

共益事業山行

本部・宮城支部 合同山行

報告者 八尾 寛

実施日 令和6年10月5日(土)・6日(日)

場 所 蔵王連峰

コース 初日：鎌先温泉～不忘岳～屏風岳～

刈田峠登山口～坊平ペンション(泊)

2日目：御田の神湿原～刈田岳～熊野岳～地蔵岳～ロープウェイ地蔵山頂駅～蔵王温泉

参加者 宮城支部＝八尾寛(C L)、千石信夫(S L)、千葉正道、草野洋一、鳥田伊志、計5名

東九州支部＝7名、岩手支部＝1名、青森支部＝1名、首都圏＝1名、本部山行委員会＝2名 合計17名

「蔵王連峰縦走」に参加して

八尾 寛

本山行は、本部山行委員会案の「山行倶楽部」の試金石として、2024年10月5日(土)～6日(日)の一泊二日で実施した。参加者は男性8名、女性9名、平均年齢71.1(53～83)才の構成となる。

本山行のコースは、次のとおりである。

第1日：鎌先温泉＝《送迎車》＝白石スキー場(8：30)～不忘山(12：45)～南屏風岳(13：40)～屏風岳(14：30)～芝草平(15：15)～杉ヶ峰(16：00)～刈田峠登山口(17：00)＝《送迎車》＝坊平(泊)

第2日：坊平＝《送迎車》＝刈田駐車場(8：45)～御田の神湿原(9：00)＝《リフト》＝刈田岳(10：00)～熊野岳(11：40)～地蔵岳(13：00)～ロープウェイ地蔵山頂駅(13：30)＝《ロープウェイ》＝蔵王温泉(14：00)

10月4日(金)、参加者全員が鎌先温泉・最上屋に集合し前泊した。

翌5日、八尾リーダーが先頭、千石サブリーダーが中央、草野会員が最後尾になり、白石スキー場から不忘山へ向かって登山を開始した。しばらくはゲレンデ歩きが続き、白石女子高山小屋跡からブナ、ナラ、カエデなどの生い茂る落葉樹林帯の登りが始まった。

しかし、紅葉にはまだ早い。小さな沢を渡りカラマツ樹林帯を登ると、少し開けた場所に出た。深いガスに覆われ、まったく展望が利かない。ゴヨウツツジ、サラサドウダンなどの紅葉が美しい。弘法清水で小休止のあと、急勾配の山道を辿り、ガレ場を登りきると硯石コースに合流した。カエル岩や不忘の碑のある広場で昼食を摂った。不忘山の頂上へ向かって稜線を歩き始めると霧が晴れ、深紅の山肌が目に飛び込み感嘆の声がこだました。タカネバラのつややかな赤い実が足下を彩る一方で、ハクサンイチゲがまだ咲いている。ひと喘ぎして不忘山(1705m)の頂上に到着した。



▲不忘山頂上にて

岩稜帯を下り、南屏風岳への稜線を進むと霧が晴れ、錦の山肌が姿を現わした。雲海の彼方に吾妻連峰から安達太良山が南に横たわり、飯豊連峰が西に聳えていた。南屏風岳山頂(1810m)に到着すると晴れ渡り、屏風岳のふもとに草紅葉に彩られた芝草平が広がった。雲の彼方には、熊野岳が聳えていた。錦の絨毯を広げたような高原の道を快適に辿り、屏風岳山頂(1816.8m)に到着した。火口を埋め尽くす霧にブロッケンが映った。この日の最高点(1825m)から芝草平(1652m)にかけての登山道は、最近整備され、階段状に均ならされていた。湿原にかけられた木道も真新しくなっ



▲芝草平から望む南蔵王の錦秋

ていた。湿原を埋め尽くすキンコウカが紅葉し、一面燃えるがごとくであった。登り返した杉ヶ峰(1744.7m)からは熊野岳、刈田岳、前山が一直線上に並んで見渡された。前山(1684m)を越え、刈田峠の鞍部(1531m)から再び登り返し、刈田峠登山口(1583m)に到着した。約11キロの山行、累積標高差は登り1265メートル、下り536メートルを約8時間30分かけ、全員無事に歩き終えた。

その晩は、坊平のペンション tooCotton に宿泊したが、6時半に食堂へ案内された。テーブルにはスープ、肉料理、魚料理、サラダ、芋煮などが所狭しと並んでいる。各テーブルにチリ産白ワインのボトルが1本ずつサービスされ、乾杯した。食後は談話室に移り、焼酎の水割りを片手に話が弾んだ。

翌朝6時のオプションルツアーには、10人



▲坊平のペンション tooCotton。

後背の杉木立がお清水(おしず)の森

余りが集まった。ペンション裏の杉木立は、お清水(おしず)の森と呼ばれ、湧水の奥に不道明王が祀られている。昔ながらの登拝路が上へと続き、左右に苔むした狛犬が鎮座している。道の両脇に聳える杉の大木(左側がねじれ杉)に渡されたしめ縄が厳めしい。かつては、ここから先が女人禁制だった。廃道を仙人沢へ下って初めて見える観音滝は、落差 28 ㍎の優美な直瀑である。約 1 時間でペンションに戻り朝食を摂った。3 名が朝食後に下山した。



▲仙人沢にかかる観音滝

御田の神湿原もまた、一面の草紅葉が鮮やかである。霧の中にチングルマの深紅が映える。一巡りして刈田駐車場に戻ったが、天候が怪しい。そこで当初の計画を変更、リフトを利用し刈田岳頂上(1757.9m)にある刈田嶺神社を訪ねた。深い霧に包まれて御釜は全く見えない。熊野岳稜線の石室跡付近にある旧制仙台二中の遭難碑を訪ねた。大正 7 年 10 月 23 日、生徒と引率の教員 157 名が集中登山中に、一隊が熊野岳付近で悪天候に見舞われ、生徒 7 人と教諭 2 人が低体温症で落命したという。今でこそドライブウェイが通じて、老若男女問わず簡単に来られる観光地になっているが、蔵王が時として危険な山になることを忘れてはならない。蔵王山神社(旧熊野神社)を参拝し、三角点(1840.3m)で集合写真を撮影した。ペンキマークを頼りに直登路を下

山すると、なだらかな広場に出た。風も穏やかなので、ここで昼食を摂った。

地藏岳(1736m)への登りで雨が降り出し、止む気配がないのでロープウェイの山頂駅前広場に出たところで、エスケープする判断をした。そこで蔵王地藏尊を拝し、山頂駅からゴンドラに乗車した。この日に辿る予定をしていたザング坂を眼下に眺め、ロープウェイに乗り継いで蔵王温泉に下山した。すると雨は降っておらず、日差しすらある。早めに下山できたので約 100 ㍎登り、大露天風呂に立ち寄った。バスターミナルへ下り、解散したのは午後 4 時ごろである。したがって 2 日目の総歩行時間は約 8 時間、総歩行距離は約 10 ㍎。累積標高差登り 540 ㍎、下り 520 ㍎に達しており、ほとんどが山道だったことを考慮に入れると、よく歩いたものだ。

本部山行委員会の中田彩委員には、宿や交通手段の手配、会計など事務全般についてお世話いただいた。この場を借りて、改めて謝意を表するものである。尾家暁夫会員(東九州支部)からは、「スケールの大きな南蔵王を美しい時期に登り、すばらしい夕焼けにも恵まれ、居心地がよく食事の美味しい宿舎、下山後のメは良質の温泉入浴、なんと素晴らしい山行だったことか」という御礼のメッセージをいただいた。馴染み深い蔵王連峰だが、その真価にあらためて気づかされた山旅だった。

公益事業山行

第 14 回 親子登山教室

報告者 鈴木泰子

実施日 令和 6 年 10 月 19 日(土)

山 域 深山(286.6m)

コース 深山自然観察路登山口～駒返しコー

スより山頂(山頂広場・四阿で芋煮会)～
深山自然観察路登山口

参加者 会員＝鈴木則文(C L)、鈴木泰子(S L)、千石信夫、草野洋一、八尾寛、支部友＝鳥田伊志 計6名
ゲスト＝親子3組 8名 合計14名

さわやかな秋晴れと思いきや、10月とは思えぬ陽ざしに汗ばみながら、当支部会員及び支部友あわせて6名が集合した(8時30分)。ほどなく3組の親子(小学生4名と保護者4名)が次々と合流し、総勢14名のパーティーが結成された(9時00分)。子どもたちの弾んだ声とともに、深山神社の鳥居をくぐり、早朝までの小雨によってやや湿った樹林帯を歩き始めた。

森の中には、さまざまな種類のキノコが自生しており、無数の突起に覆われた真っ白なシロオニタケに驚いたり、丸くて小さなホコリタケを突っついてみたり、大人も子どもも驚きの声を上げながら歩く。深山のなだらかな登山道は、こうした自然観察にはもってこいである。途中で歩き疲れた子どもが「(山頂は)まだ～」と、親に甘える姿も見られた(9時45分)。

穏やかな太平洋をはるかに見晴らす山頂へ到着すると、大人たちは感嘆のため息を漏ら



▲山頂広場の四阿で芋煮会の準備

し、子どもたちは「鎮魂の鐘」に駆け寄って澄んだ音色を響かせる(10時15分)。山頂広場の四阿では、会員や支部友が食材や水や調理具を出し合って芋煮会の準備を始めた。子どもたちにも手伝ってもらいながら、豚肉を使って味噌味に仕上げた宮城風芋煮と、牛肉で醤油味の山形風芋煮ができ上がった(11:00)。それぞれ自分のお椀やコップにそれらを取り分け、海からの風に吹かれながら思い思いの場所で熱々の芋煮に舌鼓を打つ。果たしてこれ以上の休日の昼餐が望めようか、と互いに微笑み合う。ふだんは野菜をほとんど食べない子どもが、嬉しげに芋煮のおかわりをよそう姿に、そばで見ていた親が目丸くする一幕もあった。

山頂標識を囲んで記念撮影したあとは、折り返して登山口を目指す(11時50分)。くたくたになって父親の手にすがり、兄にリュックを持ってもらいながら歩き通した子もいた。天候も良好に保たれ、すべてが計画どおりに進行し、どの親子も満足そうな表情で下山した(13:00)。それぞれの自家用車に乗って去っていく子らが「また遊ぼうねえ～」と手を振り合う姿に、我々もまた満ち足りた気分になるのであった。



▲蔵王連峰を背景に参加者で記念撮影

【行 事 記 録】

■日本野外教育学会 第27回大会報告

報告者 鈴田 泰子

期 日：令和6年6月29日(土)～30日(日)

会 場：日本女子体育大学

(東京都世田谷区北烏山8-19-1)

テーマ：「すべての子供たちに野外教育を

～誰一人取り残さない社会を目指して」～

参加者：鈴田則文、鈴田泰子 以上2名



▲大会会場となった日本女子体育大学

日本女子体育大学キャンパスの中央にある陸上競技トラックに若々しいアスリートたちの声を聞きながら、今大会は晴れやかに開始された。開会式や自主シンポジウムに続き、東京大学名誉教授であり「虫の先生」としても知られる養老孟司氏を迎えて基調講演が行われた。國學院大学の青木康太朗氏が司会を務め、フロアから次々と寄せられる質問やコメントを逐次取り入れながらの対談である。養老氏は、子どものときに何が起きるか分からない自然の中で得る原体験こそ、かけがえのないものであり、それが「生きている」ということだと語った。神奈川県鎌倉市に育ち、幼時は海辺のカニをジッと観察するのが好きだったことが、甲殻類に興味を持つ端緒となったという。幼い子どもの手は小さく、カニや虫など小さな生き物に触れるには、ちょうど良い大きさなので、彼らは好き嫌いなく何で

もつかもうとする。しかし、安心と安全を求めて物事が予定通どおりに進行することを良かれとする現代社会では、親が知らず知らずのうちに「虫は嫌い」「これはダメ」ということを教え込んでいる可能性がある、氏は指摘する。

情報化社会は人間の頭の中で作られた脳化社会であり、他者に情報を伝えることが目的とされるが、「自然のものは勝手にそこにあるだけ」である。その「ことばのない世界」で、真っさらなものに名前をつけ、自分が体験したことをどうにか伝えようとする。ことばを使うということは、既製の言葉を上手に使うことではなく、今まで言葉にできなかったものを如何にことばにするかというのである。このように語られたくんだり、教育活動に従事する筆者にとって大いなる示唆に富んだ内容であった。

本大会では多くの教育現場や実践団体によるポスター発表、口頭発表も活発に行われ、多様な他者とのより良い共生を目指す実践や研究も目立った。聴覚障害のある子どもや健聴の子どもにインクルーシブなキャンプ体験が与える影響を示す実践報告や、自然とのつながりが人々の Well-being に役立つかどうかを探る研究、大学野外実習において社会人基礎力を高める要素を特定しようとするものなど、いずれも興味深いものばかりである。自然とのつながりや自然界における原体験が、人々の健やかさや幸福感を増すなら、どの人もそうした機会や場所にアクセスする権利を持つはずである。宮城支部は障がいのある人々を交えた活動実践を趣旨の一部とし、親子登山も続けられてきた歴史がある。親世代の野外活動経験の有無や関心の高さ低さによって、その家庭に育つ子どもが自然体験の機

会を得られるかどうか左右されるという報告もあることから、まずは今大会のテーマである「すべての子供たちに野外教育を」という理念のもと、ささやかでもよいから実践を続けようと思いを深くする大会であった。

■第37回 東北・北海道地区集会に参加して(主催 福島支部)

報告者 冨塚 和衛

期 日 令和6年7月12日(金)～13日(土)

会 場 裏磐梯「EN RSORT

グランデコホテル」

参加者 草野洋一、冨塚和衛、冨塚真味子、
八尾 寛 以上4名

福島支部主催による第37回となる東北・北海道地区集会が、2024年7月12日(金)～13日(土)の両日、裏磐梯高原エリアの檜原湖最奥部のスキーリゾート地に建つ「EN RSORT グランデコホテル」を会場に開催された。参加者は東北・北海道各支部の他に、本部役員をはじめ地区外の6支部から約80人の会員、準会員等が集まった。当支部からは草野洋一、冨塚和衛、冨塚真味子、八尾寛の4会員が参加した。

7月12日(金)の初日は14時から受付があり、14時30分から東北・北海道支部長会議、15時から東北・北海道地区集会式典、その後に記念講演、17時から懇親会が行われた。

★東北・北海道支部長会議の概要(冨塚が代理出席)

・第38回、第39回の地区集会を担当する支部について話し合われた。その結果、第38回は北海道支部、第39回は秋田支部が担当する事で了承された。

・支部事業並びに山行行事共有化(本部サイト東北・北海道バージョン)について、青森支部

の中村事務局長から提案があり、取り組むことで合意した。

★東北・北海道地区集会式典

佐久間事務局長の司会のもと、渡部展雄福島支部長の「歓迎の言葉」があり、そのあと記念山行が行われる猫魔ヶ岳の「猫石」伝説についての物語がベテラン会員から披露された。

★記念講演

演者：奥会津郷土写真家 星 賢孝会員

演題：「世界を魅了する、奥会津、只見線」

・奥会津を30年間撮り続けて世界に発信→『「夢幻鉄道」只見線を300日撮る男』で映画化

・2011年7月の豪雨水害で只見線は寸断、復旧を望む地元民は少数。2007年に佐藤栄佐久福島県知事が原発関連で逮捕。県は指名から一般競争入札にすると地元建設業が破滅崩壊。奥会津消滅の危機。生きる道は観光しかない。只見線による奥会津の活性化。地域の宝(絶景)を見つけ磨く。そこでしか出来ない体験の提供、インスタ映えこそ世界を動かす。

日本の絶景の弱点は季節(夏・秋)、そこがまた最大の魅力。希望を与えてくれたのは、台湾のインバウンド観光客。「世界に誇る至宝だ」と、台湾人が教えてくれた。応援する声は国を動かし、県、町、JR東日本を動かし、只見線の復興経費は地域振興のために必要な「投資」と、認識されるようになった。

2022年、只見線全面開通、指名競争入札が復活。地域の雇用・命・安全を守るのは地域の業者(地域の人々)。然し、赤字は解消されない。スイスの山岳鉄道然り。広義の評価が必要ということで、講演は終了。演者の地元愛がヒシヒシと感じられる素晴らしい内容だった。

★懇 親 会



▲懇親会席上、左より草野、八尾、一人おいて冨塚さん。他支部会員と懇親を深める

懇親会では渡部福島支部長の挨拶、橋本しをり日本山岳会会長挨拶(代読：松田理事)を皮切りに懇親会は幕を開けた。参加支部から提供された「日本酒」も並べられ、地元の銘酒を注ぎ廻る者も現れた。大いに盛り上がった処で参加各支部が壇上に上がり、支部紹介が行われた。宴は、第38回地区集会を担当する北海道支部の黒川伸一支部長から、次回は「洞爺湖、昭和新山」で開催する旨の話があり、幕が下ろされた。

7月13日(土)の2日目は、猫魔ヶ岳登山班と裏磐梯五色沼湖沼群トレッキング班に分かれての行動となった。宮城支部4名は全員登山班。朝食後、昼食とお茶の配給を受け、バスで登山口のある八方台に移動。登山班は4グループに分かれての行動となった。

9時に登山開始。八方台の登山口から猫魔ヶ岳(1403m)に向かう。八方台の駐車場は県外ナンバーが目立ち、満車状態だ。緩やかに登る広葉樹の森を進む。20分ほど歩くと立ち入り禁止の看板が立つ場所にきた。上を見上げるとリフトが伸びている。スキー場の拡張工事が進められているようだ。

45分ほど行くと、見晴らしの良い場所に出た。磐梯山が目に見え込んでくる。然し、ここから見る磐梯山は、何時も目にする山容と



▲三角錐の山容を見せる磐梯山

は異なりピークが一つだ。その山容を脳裏に焼き付け先へと進む。

1時間20分ほどで三角点が設置されている猫魔ヶ岳に到着した。此処からは磐梯山、吾



▲猫魔ヶ岳の山頂にて

妻連峰、猪苗代湖など、福島を代表する景観が楽しめた。休憩後、猫石(1335m)を目指して足を進めた。一旦下って登り返すと、石というよりは大きな岩といった感じの猫石に辿り着いた。時刻は10時45分。



▲猫石にて冨塚夫妻

此处で眼下に雄国沼湿原を望みながら、猫石に腰を下ろし、早い昼食を頂いた。眼下の雄国沼湿原はニッコウキスゲが群生する事で有名だが、今年は高温続きのためか、開花は1週間以上早く咲き終えたそうだ。

40分ほどの昼食タイム後、来た道を八方台登山口へと引き返す。八方台登山口には13時20分に到着、全員無事に登山を終えることが出来た。登山終了後、バスでホテルに到着、随時解散となった。



▲八方台登山口に無事下山し記念撮影

■アジア山岳連盟創立30周年記念事業 「国際山岳平和祭 in 長岡」2024 に参加して

報告者 千石 信夫

日 時 平成6年7月25日～27日

場 所 新潟県長岡市弥彦村

宿 泊 ホテルニューオータニ長岡

参加者 千石信夫、千葉正道 2名

アジア山岳連盟及びアジア山岳連盟日本委員会が主催する国際山岳平和祭として開催された記念式典や祝賀会に、25日の行事から千葉正道さんとアルピニズムクラブの会員として参加した。昨年、本会の元副会長であり日本山岳スポーツクライミング協会元会長の神崎忠男さんから、日本山岳会として協力

しているので是非参加するよう要請があったこともあり参加することにした。

25日11時にホテルニューオータニ長岡に集合し受付を終え、ホテルからバスにて弥彦山で開催される高頭祭会場の弥彦山へ向かう。弥彦山駐車場で参加者が集まり用意された昼食を終えたところで、海外の岳人たちが大勢いる中に、懐かしい顔があった。中華民国山岳協会理事長の黄(Huang, Pan-Nan)さんだった(漢字では出てこない字)。6年前に玉山に登った時にお会いした理事長さんだった。宮城支部として特別な交流があり、台北にある中華民国山岳協会の事務所に我々宮城支部の玉山登山隊を歓迎してくれたことが思い出され、スマホにその時の写真が残されていたので、お見せしたところ大変喜んでくれた。その会場におられた方も数人おられ、お互い握手を交わし再会を果たして喜び合った。

その後、弥彦山の太平園地に向かい、高頭仁兵衛の碑前にて高頭祭が開催された。高頭家のご子孫などが参列され、越後支部長の挨拶に始まり来賓祝辞が続き、そのあと参加者全員にて献花した。この高頭祭は日本山岳会越後支部の主催で行われている山岳祭であり、高頭碑は昭和25年に弥彦山頂に建設され(昭和35年、太平園地に移設)、その年から高頭祭が開催されている。

その後、ロープウェイにて下山し^{たいまつ}松明登山祭に移る。この祭りの始まりは、明治20年代まで行われた「雨乞い」行事で、晴天が続くと弥彦山頂に仮小屋を作り、雨を願い昼夜を問わず祈祷し、少しでも雨が降れば仮小屋を焼き、松明をかざして下り、麓では提灯をかざして登り迎える行事を再現した農民事務であったそうだ。その後、初代越後支部長らが支援し今では、新潟山岳協会や県下の山岳会や

全国から岳人が集う山岳祭になった。本年はアジア山岳連盟の行事も相俟^{あいま}って盛大に開催された。

参加者に松明が配られ弥彦神社本殿でお祓^{はら}いを受け、鼓笛隊の先導にて行列が始まる。弥彦の街中を行進し、我々の行進に街中の人たちが拍手で迎えてくれ、祭りの参加者として嬉しい気持ちであった。海外の岳人たちと練り歩き、まさに国際色豊かなお祭りになったのではないかと思います。

翌日は記念式典が始まるまでの時間を、各自座禅を組むグループや名所旧跡巡りなどに分かれ観光となった。千葉さんは単独で、鋸山(765.1m)に登るということで別行動となった。私は曹洞宗の安善寺というところで、海外の人たちと一緒に座禅を組むことにした。記念式典が午後3時から始まり、アジア山岳連盟(UAAA)会長の In-jeong Lee 氏の挨拶から始まり、来賓紹介、功労者表彰、卓越登山の動画、未来へ紡ぐ龍神太鼓で締められた。

17 時からは記念祝賀会が開催され、参加者約 200 名の各国代表団が紹介され、それぞれお国自慢民謡などが唄われ、国際山岳平和祭に相応しい懇親会となった。

翌日は、地元の越後支部の渡辺茂さんの案内で、守門大岳(1432m)に保久礼登山口から途中雨に見舞われながら大岳山頂に登った。

“山頂からは眺望が素晴らしい！のです”と説明はあったが、残念ながらガスの為、全く眺めることができなかった。山頂でお昼にして滑りやすい山道を無事下山した。途中、“地元栃尾の名物、油揚げの美味しい店があるので寄りませんか”と渡辺さんから勧められ、その油揚げを仕入れて帰った。私は知らなかったが、栃尾の油揚げは有名らしい。自宅に帰っていただいたら格別だった。参加者は坂

井広志氏、込田伸夫神奈川支部長など総勢 10 名となった。

■宮城支部ビールパーティ

期 日 令和6年8月3日(土)

会 場 ホテルメトロポリタン仙台イースト
3F フォレスト・キッチン仙台

例年より遅く梅雨明けした8月3日、東口にあるホテルのテラス広場で、バーベキューを食しながら恒例のビールパーティが開かれた。夏の陽射しが西に傾き、心地よいビル風を感じながら、柴崎徹会員による乾杯の音頭で夕方5時からはじまった。



はじめは生ビールやドリンクを飲みながら、バーベキュー・コンロで焼かれた肉やソーセージ、野菜などに舌鼓を打つ。お腹が満たされた頃、出席者一人ひとりから近況報告があり懇親を深めた。その後は、担当者より連絡事項はじめ今後の活動予定が案内されると、質問が飛び出したり参加希望の声が発せられ、臨時の役員会のような様相となる。夜の帳がおりる7時過ぎ、2時間コースの時間となり、千葉正道副支部長の締めの挨拶で散会した。

〔参加者〕千石信夫、千葉正道、冨塚和衛、柴崎徹、草野洋一、鳥田笑美、鳥田伊志、冨塚真味子、横山哲、鈴田則文、鈴田泰子、八尾寛、石川弘子、鳥山文蔵 計 14 名

(報告者：鳥山文蔵)

■第8回 宮城・山形支部交流会

報告者 八尾 寛

期日 令和6年9月15日(日)・16日(月)

会場 山形県飽海郡遊佐町吹浦

「遊樂里(ゆらり)」

2024年度交流会は、山形支部の主催で山形県遊佐町の「遊樂里」を会場として実施された。温泉施設、食堂、キャンプ場などが併設されていて、すぐ近くに道の駅もある。しかし、施設横のグラウンドには廃棄された家具や電化製品が積み、7月豪雨の爪跡が生々しい。受付に先立ち、遊佐町の名勝・十六羅漢岩と三崎公園を訪ねた。十六羅漢岩は鳥海山の噴火で流れ出た溶岩からなる岩礁で、日本海の波しぶきに洗われていた。三崎公園には、“奥の細道”の旅で芭蕉と曾良が歩いた石畳の道が当時のまま残されており、しばし感慨にふけた。

交流会に先立ち、小雨の中、山形支部長・鈴木理夫氏の案内で、会場近くの大物忌神社吹浦口之宮を訪れた。約150段の石段を登ると、月山神社と合祀された壮大な社殿が目に入った。鳥海山そのものが御神体で、山頂の大物忌神社本社へ至る吹浦古道の跡が社殿脇から始まっていた。



▲大物忌神社吹浦口之宮を訪ねる

次いで、鈴木理夫氏による講演「鳥海山に関

する幾つかの話」があり、地質、歴史、文化などについて学んだ。この講演で紹介された木山由紀子さん(酒田市在住のイラストレーター)の筆になる「イヌワシが見る鳥海山」は、尾根や谷が立体的に描かれていて印象的だった。山形支部の「学校から見える山」プロジェクトは、2016年度に始まり、木山さん筆の鳥瞰図を山形県内の小学校に順次寄贈しているという。

交流会には宮城支部から6名、山形支部から9名が参加した。千石信夫氏(宮城支部・支部長)、鈴木理夫氏、小野寺喜一郎(山形支部・元遊佐町町長)らによる挨拶に続いて乾杯し、和やかな雰囲気のもとに始まった。しばし、遊佐町の地酒「杉勇」などを味わいながら歓談し、草野洋一氏(宮城支部)の中締めで、会場をホテルの一室に移した。

翌日は、前日と打って変わっての晴天になった。ホテル7階の朝食会場の窓からは、庄内平野から鳥海山がすっきりと立ち上がって見えた。宮城支部6名、山形支部5名は適宜分乗し、鳥海ブルーラインを経て大平登山口へ向かった。各自、準備を整え8時30分ごろ、笹ヶ岳へ向かって登山を開始した。約1時間歩いて見晴台来到と、眼下には日本海が青く広がり、飛島や能登半島まで見渡された。



▲鳥海山から日本海を見下ろす

鳥海山の裾野には、風車が立ち並んでいた。

また酒田市街の彼方に摩耶山、朝日連峰、月山などが連なっているのが見えた。最上川の河口からは、茶色く濁った水が海に流れ込んでいた。前日の激しい雨の影響だろうか。

爽やかな風を受けながら、リンドウの咲き乱れる草原を分け、11時過ぎ長坂尾根の稜線に出た。正面には、ど〜んと鳥海山の主峰(新



▲鳥海山長坂尾根にて記念撮影

山と外輪山)が聳え立っている。手前に盛り上がっているのは鍋森である。笙ヶ岳の彼方には、ちょうど実りのころを迎えた庄内平野の一角が黄金に輝いていた。御浜小屋まで約30分歩けば、鳥海湖のほとりに達するとのことだったが、下山時刻を考慮し、ここで昼食をとって往路を引き返した。今度は眼前に、日本海の大海原が迫っていた。遙かに広がる鳥海山の緑の裾野の上空をイヌワシが一羽、ゆうゆうと舞っていた。

〔参加者〕 千石信夫、草野洋一、細川光一、八尾寛、鳥田笑美、鳥田伊志 計6名



▲夏山山行で(撮影：佐藤善武)

【随筆・エッセー】

救助活動の回想

～人は誰でも 自分は大丈夫と

思いがちである～

高橋 二義

私が携わった遭難救助活動(報告)〈第2回〉

2 単独沢登りで滑落・転落。

鬼首、禿岳火の沢 遺体収容

(昭和43年10月7日・8日)

この遭難は単独で沢に入り、本流と支流を間違えて登り、滝の高巻きに失敗して約80m位滑落し、更にそこから滝壺に真^まっ逆^{さか}さまで転落して頸^{けい}椎^{つい}を損傷して死亡したものと考えていました。

この人は小さい時に耳の病気を^{わづら}患^わい、仙台山想会に入ってきたときも特別で、古川からお父さんが何とか面倒を見て欲しいといって、入会を父親が申し込んで来た人でした。一人で山に行くようになって家族の心配が大きくなり、父親が強く入会を勧めたのでした。しかし会というものは、いろいろと規制があって面倒なものでして、本人は馴染めなかったものと思われます。

10月6日の朝、花瀧山に行ってくるとのメモを家族に残して出かけたのですが、実は禿岳に沢から入ったのでした。6日の夜に帰らないので、家族が警察に救助依頼を出したわけですが、残されたメモで花瀧山を地元救助隊が搜索したのですが、見つかりませんでした。

いろいろ調べて禿岳に入ったと思われる事が、バスの車掌さんからの情報でわかり、更に父親から強く止められていた「火の沢に入

ったと思う」との父親の言葉で、会では火の沢を搜索する事に決めたのでした。

この時、私の班は3人で、第一分岐の枝沢が割り当てられ、その分岐で他の班員と別れ私は初めての分岐に入ると、すぐに誰か近日に入った足跡を見つけました。ぬかるみの足跡、秋なので倒れた草はそのまま。しかも小さな滝も高巻きしているなど不自然な登り方をしている足跡でしたので、3人で顔を見合わせて何だか感じるものがありました。

まもなく、それが的中して遺体発見となりました。それは悲惨なものでした。脇の泥に頭の跡があり、転落して弾^{はず}んで倒れたものと思われました。転落の衝撃でザックは飛び、ズボンのベルトは切れ、お腹^{なか}が大きく膨らんでおりました。

午後に梱包機材が届いてから、沢の搬送で岩上を引き下ろすので、それを考えて芝櫓もやや太めの立ち木を切って作り、更に舵棒^{かじ}を取り付け、それで包むように乗せて搬送したのです。が、途中で一度修理しました。下に来て、沢から出て到着の150^{くらい}前で、今まで引きずっていたもの^{みんな}皆で担ぎ上げて、暗くなる少し前に家族の待つ場所まで運びました。すぐに警察の検死を受けて、暗くなってから自宅まで移送したのです。

後日、どこから落ちたのか調査した。発見地点の約80^{くらい}上部岩の斜面で、スリッブ地点と思われる場所を確認する。そこで足を滑らせ、そのまま腹ばいで滑り落ち、滝場の上で両足が付いたと思われますが、ザックの重さや滑落の速度で止まれず、回転するように逆さまになり落下したものと推察されます。それは滑落途上、手で止まろうと抵抗したと思われるように手袋が手首からまらめて引き抜かれ状態で、左右数^{くらい}離れて見つかつ

たことから、滑落時の体制を推測致しました。

3 道迷い一晚露營、泣虫沢源頭部

(昭和44年10月5日) 翌日 自力下山

これは男1人女2人の3人パーティで磐司岩の向かい、北流している「泣虫沢」で発生したトラブルでした。

5日の夜に参加している女性のお父さんから電話で「うちの娘が山に行って、まだ帰っていない」という連絡が、直接私に入りました。またかと心配でしたが、「まずは調べてから返事します」とお話しして、その夜10時過ぎに泣虫沢の入り口まで行ってみました。真っ暗闇で大変静かな夜でしたので、大きな声で呼びかけてみたのです。何度か呼んでいたら、返事がありました。その声から尾根の上にいると判断して、大きな火を焚いて待っていましたが、一向に近くならないのです。

それで火を消して暗闇の中を一人で藪尾根を登っていきました。案の定、藪尾根の上で小さな火を囲んで3人が、しゃがみ込んでおりました。3人は無事で、無傷である事を確認しました。そのあと現在位置と下降ルートを説明し、明日明るくなってから下山するように話して、再び私一人で登った藪尾根を藪こぎして下りました。帰宅して電話をくれたお父さんに報告しました。すると「会って来たのなら、何故一緒に連れて帰らないのだ」と叱られました。彼らは翌朝早く下山し、タクシーで帰ってきました。

このトラブルは、源頭部での細かい沢の分岐を読み違いして、少し北側に張り出している尾根に上がってしまったのでした。帰路は東に進むのですが、南に少し下りになるこの場所で、市町境の尾根でないことに気付いたが、現在地の場所確定が出来なかったと思わ

れる。そこで暗い時間帯での行動を控えての
ビバーク体勢で、明日が明けたら再度地形確
認すれば解ると判断したものと推察しており
ました。当時、携帯電話の持ち合わせが無く
連絡できなかったのも、家族を心配させてし
まったのです。行動が計画通りに進まなかつ
たときの連絡が、如何に大切であるかを勉強
したトラブルでした。(つづく)

【今後の行事予定】

- ☆11月27日(水) 11月定例役員会
仙台市生涯学習支援センター(東口)
- ☆12月1日(日) 初冬山行 オボコンベ山
- ☆12月15日(日) 宮城支部晚餐会
ホテル白萩(青葉区錦町)
- ☆12月18日(水) 12月定例役員会
仙台市生涯学習支援センター(東口)
- ☆令和7年1月1日(水) 元旦登山 泉ヶ岳
- ☆1月15日(水) 1月定例役員会
仙台市生涯学習支援センター(東口)
- ☆2月 厳冬期山行 期日・山域は未定
- ☆2月19日(水) 2月定例役員会
仙台市生涯学習支援センター(東口)
- ☆3月 早春山行 期日・山域は未定
- ☆3月19日(水) 3月定例役員会
仙台市生涯学習支援センター(東口)
- 諸事情により日程、場所が変更する場合があります。各行事及び山行は、その都度メール等で連絡させていただきます。ご確認の上、ご参加下さいますようお願い申し上げます。

《会員の皆様へ》

住所並びに電話番号、メールアドレス等が
変わりましたら、事務局までご一報くださ
いますようお願い申し上げます。

〈事務局〉

『宮城山岳』第29号の原稿募集

宮城支部の機関誌『宮城山岳』には、
会員並びに支部友皆様の投稿による
「紀行・随筆・エッセー」のコーナーが
あります。青春時代の思い出の山をは
じめ、忘れられない山、ふるさとの山
など、山に関する内容であればテーマ
は自由です。来年5月頃に発行予定の
第29号に、下記の要領で是非ご投稿
ください。

記

- 文字数 800～1600字(横書き)
- 原稿と関連する写真があれば1、2
枚、キャプションを付記
- 原稿締切り 令和7年3月末
- 送付先 yrdbf275@yahoo.co.jp
- 問合せ先 鳥山文蔵 TEL256-1459
会報・編集出版委員会

【編集後記】

ことし皆さんが登った山々は、鮮やかに染
まった紅葉に彩られていることでしょう。や
がて北風で落葉となり、いつの日かモノト
ンの風景に変わっていきます。「山が装う」(紅
葉)、「山が雪化粧」(初冠雪)など、『山』を擬
人化する慣わしがあります。私たちは、「山に
怒られないよう」山登りをしたいものです。

さて、昨今の宮城支部の活動は、コロナ以
前にも増して活発となってきました。お陰様
で、今回の「宮城山岳通信」第34号は、ボリュ
ームアップの内容となりました。引き続き会
員皆様の諸活動を掲載し、次なる一步になれ
るよう編集していきたいと思ひます。

会報・編集出版委員長 鳥山文蔵

宮城山岳通信 第 34 号

発 行 公益社団法人 日本山岳会宮城支部

発行日 2024 年 11 月 8 日

発行人 千石 信夫

会報・編集出版委員 鳥山文蔵、千石信夫、冨塚和衛、三宅 泰

事務局 〒983-0821 仙台市宮城野区岩切字畑中 9-12 (冨塚宅)

連絡先 TEL 090-2790-3771